源氏物語評釋

第參ノ分冊

七

京都帝国大学文学部図書

第七帖　紅葉賀　評釋

【釋】冬の名は詞をもて号ぜど但歌ども多くは紅葉賀とつづけさせる詞は見て作ぜば試楽の日
のくれぐれまでつまびらかに紫のうげやさぐくしくまりて又花宴をふ作ぶ所の名とぞ
又後のこゝ紅葉賀まこののふくりもおぼしいでることあるかれこれ
をとりあつめて冬の名とせるこゝろのこゝろ作ぶ拙なる和泉苑よりおもの賀
きこゝめもべきことあり又後井のうあふ藻の品れ賀しぶあとぶりう又中の賀といふ
半あり兼和の所対紅梅の賀おこゝろそこゝろ作ぶとられらの名目を作ぶとそこゝ
【細】賀こゝは其年の満こゝを賀して行ふの宮ぶを祈こゝんく天皇の作賀は仁明天皇
嘉祥二年三月典福寺大法師等奉賀天皇満四十こゝをこゝぶあこ太上天皇の作
【新】賀は四十より始めくまこゝ十こゝを満こゝぶに賀ぶ作こゝ懐風藻ふ年賀の詩
あり御ぶは皇朝にて年賀とこゝもいこゝ古き世より作こゝりされぶすべこゝぶの作賀
のすは世物のぐこゝくのこゝ作
【玉】源氏君十八の十月より十九の秋すぐこゝ或人間君世も未描ぶも世こゝもこゝぶれ
四年ぶこゝは作こゝりて世こゝ作こゝ作こゝ作

釈 巻名の事 諸抄のごとく十月の十日ばかりの紅葉の宴しばしばの事なれば、紅葉の賀とぞいふなるべし。次の花宴の巻へて花の宴とおなじく実と実とを対して名とせるなるべし。

評 此巻の長恨歌は朱雀院の行幸は神無月の十日ばかりなれば、紅葉の賀を書あらはすべき筆法なれども、いとゝ辞の勢ふかくをぼえ、さて行幸のすがたかの玄宗の時の事なれば、彼来朝と相照して年月の事をゆるさるゝ法なれども、彼と此と事を分ちて結構をも示すべきなれば、さてこの巻は若菜の巻とはかはりて、源氏君の御賀の事をとゝのへ、紅葉の賀の事をとゝのへ、花の宴の事をとゝのへ、さて

[illegible]

○源内侍の一段老女のさまあたらしくさまをいとよく写しうまてうつくしき所のいとめでたくおもしろくもてかわの下ゑ[illegible]いとおもしろくあるまとのあるとあるとあると

内裏にてをそせまひく花毫女作りこれをなんをそのあり
源氏の中おもかげの所中おもかげ　玉補　かく源氏をくめるふ秋ふやけのくゝうり称すゝさうり
まち海波　河　南宮譜云此曲兼和御時大納言良峯安世朝臣奏勅命作此舞時依勅改盤渉調但詠
小野笠朝臣作云々　舞装束　表袴　文小葵　青色袍　蒲萄染下襲　裏面大海浦　裏蒲萄　大海浦半臂　舞手向方
摸寄波引波体　花　まち海波ハ整渉調唐ゆ
うとてゝハ　釈　うとてハ片相手とゆ
花のうとりのこゝやまず　王　月もうつゝ
まるべゝうゝ　花　うゝ花の青九云花のゝ
いもさゝおりみゆ　釈　ゝゝさ花のうちあひ
入ゝこの月ゝげうゝ　釈　ゝゝさ花のうちあひ
おりちハ新つきとつゝさまて舞のおりふおりゝあるさまをもるをいん
えつゝすゝゝうゝハ　河　詠曰　桂殿迎初歳　洞楼媚早年　剪花梅樹下　蝶鶯畫深邊　釈　このまゝ
あゝ退字あるべきと新釈ゆもいそまゝこういゝゆゆもおゝ穂ゝゝびさて右の詩を字まのまゝふ詠めて吟ゝる
をゝゝゝハゝるゝおり和名抄ゆも青海波の下ふ有詠とゝゝう
おゝけのゝゝりまゝゝびんゝゝのゝ　和　りまゝゝびん
ゝまゝゝうゝとゝゝうゝまゝを佛の説法れゝふゝゝゝゝゝるゝ　釈　佛の字ハをゝの上よゝあゝまゝ
みゝゝびゝふゝまゝのゝびゝゝゝ　風　桐ゝゝゝゝゝ

わらは女房などぱんうらいとみくだめくり。
耳留
花つづいはぱやけるたんあるうまうまうばよて
えんでるくんてまうとおびとそふ花のこもち
なんしうひきるうあてやどてはこのるな
藤ノ宋楽　スグニ　直宿
てはこのあの君をいはれふて地下とハ手結しふうるのさて
まひの所の男ども
湖　をハ侍人の舞人れ書
くくくくあるのくるすぐ
釈　てくくくハ児ハ繁のさて本ボコ
メキテうてくくれらくさて
くるんの日かくてくあまバ
眠　試ホれ日かくくあるうなれ
されバ楽のりやはは日ぐきあん
くくくく
見せをくんのくて　釈　花つぐよ
見をちんくて用ささせてくと
はれのうぎるれはは何ふくく
いふはは侍ぐんくく　釈　時るの
華をいるはは侍ぐてくん花壇の

試　直宿　事　暫　ナニトナウ　カクベツニ　手　舞　得　オホドコニ　ナルホド

花房をぐぱんうらいとみくだめくり。
耳留
花つづいはぱやけるたんあるうまうまうばよて
えんでるくんてまうとおびとそふ花のこもち
なんしうひきるうあてやどてはこのるな
藤ノ宋楽　スグニ　直宿
てはこのあの君をいはれふて地下とハ手結しふうるのさて
まひの所の男ども
湖　をハ侍人の舞人れ書
くくくくあるのくるすぐ
釈　てくくくハ児ハ繁のさて本ボコ
メキテうてくくれらくさて
くるんの日かくてくあまバ
眠　試ホれ日かくくあるうなれ
されバ楽のりやはは日ぐきあん
くくくく
見せをくんのくて　釈　花つぐよ
見をちんくて用ささせてくと
はれのうぎるれはは何ふくく
いふはは侍ぐてくん花壇の
華をいるはは侍ぐてくん花壇の

試　直宿　事　暫　ナニトナウ　カクベツニ　手　舞　得　オホドコニ　ナルホド

見ずふとそのつけてハるぎうも
あるたみうぐちあるでさぶら
ら舞くわくく　新　君をふくれ
をのくをくバるまふべさんちぐ
ハかとうは侍ぬさくくびハたせ
ちくんの出料あるこバ法て神を
めぐをくくさるをちをしてく
きやいるやくく
はんろう　釈　こようくふくく
さくさて次の羽ぐもハはぬうの
ありとるのようを地ろ侍ぐくく
めもあやあるくくく
細　平生ハるぐくれはは法くのもあち
ヲくくくふはぬうのあるはれる
義をくびあくあふくくびはひ
あるてぐと若ふ地ぶくくくく
かくくくのくく　細　ち廣波ハ度
楽をうるくくのくハくるくあるう
あるこバ初ぐくはのは法舞ふ
さ四ぐびはあくあぐれさちるこぐさ
うはようく

釈　此方の上句詳あるこぐ安家ふ
神ふるるかくくあるふ古事といふ

○ありみちの父

なまめいくるすぐ法えるるんんをぬぬくこの
艶麗
日かくはくくつまぐぐかみぐのうげやさくく
畫　蔭　モノサビ
くくくとはくくどんをなくんれんくくよくい
シウハルラニ　〈藤ニ〉　用意　シタク
きくくせつくるぐどゆくくるふはくくはくのの
見ついくくよはは法くくくんよふちくぬぐくくん
改の行　翌早朝　源氏
ちなくくくくくくて
〈舞侍リシ〉
保
はくくふ
おふわしんちくきやあかくくぐはくく
見くくめくくあゆるくくしはくくはくくもふぐんのひ
若早地　〈源〉
志のぐれどやはくくん。
コラヘラレズ
かくくくの神ふくくくはくはくくまぐくくくる

よけてあそまてくハんさおくうてよハとあ
るをかざりのうめづ〳〵くがうやうのうる
さく〳〵（不案内ナラズ他朝）くうびくのみどもまでおじし
やまつる清きさたことばのやうにてもとほ
をまれてぢ（持后）（詞）（豫）（とおとろく）
ぢつつ。行者よハみうちちどせふのうる
人なくつうまつりまつる。歩さめもおり
ゆるて。きこのがくれふひどもこだめぐりて。（楽）（船）（漕）（巡）
めぢうこあそとてうるまひどもくされ
ちうつ。かくのあ。たぐこのれと。（唐）（高麗）（盡）（舞）（種）（多）
一見れ源氏はタうげ。ゆくうおびされて。（鼓）（音）（帝心）（忌々）

てあれとハ見侍らうしとこあそのたうじふもちさあり 訳 大うふハあられと見えとのおこを云ふのひとくこ
かうやうのうさくうどくうくうびこう。 訳 上ようるごとくこうのちは源氏曲の源氏の古事をそくこちうて
どくうくうびて他朝までおびうやまるハまうてふ人の男をあるべきはは伝げられ伝何ぞとその才学をた
めうつあるべうたちは細流あぶふ左右の楽れるひめ伝幼さたハ唐楽とあ別しあるのれやうふ伝うくハ
いびあうん女あるうりともそのせるさびうりの楽ちうあうんハ伝れめづうしは楽うハあくべき物考ふべう
拍伝のやうう。 訳 持経ハあを弱びそびは伝びてよむ物あるびハ源氏見の伝ふ人をた切うりのあるを
うこうていへるう四伝伝つうさまびて
行楽ちハうく 嵐 ちうう行楽の当月伝く 訳 見伝る義ふびふうれを行楽のちはとうれるハうこ
まうのびくれ拍ども 訳 音楽ちうくうは伝度の他は拍を源べて薄めびうつ奏ちるのこあふ伝のとハうく
あうこうあちとうてうる 河 唐左 高麗右 唐の楽を伝くさうる
くさるわうう 箏 稚くの楽拍ちきあう
かくのあうつびみのあて 新 拍雲ちてふ伝を帝のうふやあるを伝ひびうりうあをひびうりうこ
楽とハ示弁をういひくさてるぶ中ようこあるつびみ
訳 楽ふかくハ角ちく帝の名うや楽のあう被のあるこあうしあ
兼名苑注云角本出胡中或云出吳越以象龍吟也揚氏漢語抄云大角波良乃布江小角久太能布江とうて
さうりかるおを楽器ふ交へく引ちうふもあるべうめの大単巣尺八ちび六文へうこもそのべきく又和名抄音楽
の曲調類ふ角調曲とうもあう考へ合さべうさてせをひびうはとハ今日の舞楽のあびさてうくこせ中へ留
くうびの伝氏はちうびげ 細 あふ拍ちどこあるあうこうるあうこうをみびどのちうあうるべうよあうずめう試楽のはあうるまでとあうひ
あふ行楽のはこ微笑のうこうるあうこうをみびどのちうあうるまでとあうひ
伝こうこうあうを拍ふて上下の思をてうるくうれようとかいうあびくいあうう当日のあうくこうあ伝
あるハうびつう皆尚はのうをいの中ふこの比補伝のあう文書楽のあうをあうこうもうるこうびハ兼日のあうあるこうこ
さうこうさみいひて楽くこうる例の文法こううこびべうこうこ

かいーろ　河 長秋々第番云四十人之内有序二人破二人垣代二十六人云々第人のうちひく輪堂の輪作とて舞台の上ふまろく立めぐるく時時懸比巴あり云々

弄 垣代よハ地下堂上相交舞云々四十人の数も云々不同

新 垣代の中ゑらびて舞人ゑらぶのくもあり又ゑのもぞあれ人〳〵反曼を打て拍子をとゝゝゝ云々

玉補 三四十人の人立めぐりて笛ふくゝまま舞人のゝめよ垣のゝゝゝあるゑふかいろとゝるゑべーいゝゝく

新 四有職とゝ故実学問のゝゝあるべゝゝゝあるゝをゝゝふあべゝゝゝゝの愛ゝゝゝの和ハさゝゝ業ゝあゝゝとゝゝゝゝよゝゝゝ大切ゝゝゝふハ事ゝゝゝゝゝ人をゝゝゝゝゝ

なれてを（十一手）ぬくるいわあやのぐ（入綾）そぐろ
さもむ（スルホド）ぐこのよれ事ともおぼえぐ（ハット）ぬ
まぐさ（下）ちもくもどのぬれりといぐ（岩）ぐれ（隠）。
むのこれ（木）たにうづめまぐ（埋）ぐるさへ。さぐ（葉）ぬ
のんちるハ。ぐ（マデ）ぬ（ジョウキャウデン）ぐ（皇子）ぐ（童）ハ。て。秋風
はちれ（腹）ぐ
楽まひ（源）ぐ（次）ぬ
けるぐ（盡）ぬ
こと事ふめをうづぐ（他）めぐりていとざ
ぐ（加階）ぐ
ぐ。ぐ（源）ぐ（引）ぐ（源）ぐ（源）ぐ（源

花 延喜御記云夏觀以来奉賀時有叙位之例已從四位上
ありうへう
四下のうへ 細 叙正四位下也今まで從四位上 秋 加階とハ位の階をかへうへうと
さるべきうぢうのよろこびとのもの
湖 昇進のよろこびと 細 源氏ハ
よひられて若菜をうへうと
若のせゆうげく
細 源のおもせのゆうさとく
秋 仏説ハすべてせの業もは
前世ゆうのお業ともるあふこの
源氏ハ人の目をもゆうをもようこそせのひくあるぬす
あるハあせふいうある因縁のある
うやをれもうまわうとくるを
ゆうげくといへくあり
あてをれまうでのひぬ事ハ
細 若菜の里亭へ退出
眠 あつかれたあるをうぐひ
あるハあと仕うまつてくこと
をやくふてあどいふぐと
さるべきまつ
湖 とかくいひ

こゆるもあまでんうたくきいの人
のやうにうみのたつぐ。秋もうくおく
うてなぐさんやてんかのをたつぐ
よのこと
ゑまぐらたすさびまも出るぐうぐの人
はるさすれうやよ。ことのたらぬとおぐ
ゆるきぐずもあ。ようさたよんなあわ
うめてうぐ。あそれよやんぐふくゆひ
ゆゆるんをもたちのつぬなどてたつめ。
たひよそあげ。あやされなんとおぐく
うるぐくうぬはんのおぐも。おのづうと

語 慰 源 案外 抗 成 イはナシ イきに ナグサミ 菱 ナニガ フツクナ イちうナシ 流 イあさうよ タフトク 始 ウチ 直 穏 竟 (菱ノ) 自然 輕々

さうぐあぐいうたくゆの花ぐび
のすあ平きあきぐ
いとぐうのうろうさうく
玉補 いとぐとうくとうのおぐい
うへうまうう 眠 私云若菜の
半ぐぢうぐ行すゆ眺をあうぐ
とうのは二年院ふ人むうあ成
まあうの半とうひううふく先ハ
元ぢふ先ふむうとうあ入時うの
半れ
うちくのあうきぬハ 眠 若菜上
ぐうはものいまぐいうげるはを
ちうあうねばかくおぐはもとうう
くうつうくうう
細 若菜上の性をうあしちを打とみ
ざるやくうふ平生のあうきれ
ぢうくさやうふうよあうぐハ他人
ふとくるんもみ生ハ花ぢをとし
湖 帝おふちんぢてきうきをハ
うまるう平ふちのめ生うう
ぐうんふをもふううぐうあ
あうぐハとぐへうふをひ合ぐべ
ぢうぐハふのくとうふいのふちく
秋 若菜上の業ハよりとはぐりて

半をうのすうくうハうあうあうう
人ハ見つ紫上 憑 幼 をうなき
まて。ぢんつい行ぢまくにいとよたんぐまうぢち
ぢんあくむつまくまつちゆくうぢふ。 壁 纏 ナシ ト
ぢうくうの関れ人ゆもあれとうもぐと
おぐうて。物とのまくうるいうはちつひ 離 對 コシラヘ
ふなくしく。わまもあけれいりおそて。 似 無 イはナシ 涼 明 暮 入
ようぐのの半ど成をくへゆて行ふて 教 手
ちんうたくあくそせちどくつ。ぐたうあり 本 外
うる法むすあを。むくへうんやうあぐ 迎
おぐくうる。まん所ふの司あぐをちぐん。 家 政
くとうふ別ちてんあとあうぐハたうまつ 分 別 シツユウカリナトク

なりてのちふんづけるをふとうさえ
ゐをうごかしたるのびあがりきあがりもいで
くるとて主殿のあひだれ居なる
かくのごとうんみぐき
人よりもたかふ　紙　源の元服の条よ
まのそひぶ　あきぶ
ゐをもちてのちぬ　新　或説ニ　ちぢみ源のゐをもち居
ハぬ御子をといへどいはいぐいて神の
ちの時ハいかもあるもあらぬ　今も知や
源のゐを知りぬ　ちをいふ　ちを
将ちる時ハ　ちの文と通ひあり
おぢ　くるぐ　かぬ
紙　蓬上の女性ハ　ゐに　しうち
ハ　ちのづ　ちひ　ちうちと
ちうさて　ひよハ　ハ　ちかり　ちきれ
なんと　憑　と　強く　懐柳　ちる
中　ちかて　ちの女性の　ちを　挿て
ちうハ　俗の文法と
をきちる　人ハ　ちう　細　ちうち
世上のちく　玉補　ちハ　ちひ　ちる
つくとハ　羽すみつく　源　ひつく
又　俗俗　ちうつく　ちの　ちくと

らせのふ。怪異よりわうれ人ハ　ぱおかつ　れく
のごちひ　ひやとうつ。かの以　ちもうしまて
行そざわ　ちうる　姫　ちる　ちと　ちひいで
ゆのえのふ　時ち。あま　ちをちひ　ゆえのふをう
おかくう。ちの源　ちのわをする　ちどハ　ちまだ　ちうち
ちふ　ちよ。よる　ちどハ　時　ちて　ちうちへ　ちく
かちこの　ちいと　ちて。ちれバ　ちのふを。
ちうちひ　ゆて　ちふを　ちうちどある　ちいと　ちうう
ちく　思　ひきこ　ちのつ。二三百　ちふさぶ
ちうひ。ちを　ちもおを　ちをちハ　ちいと　ちく
ちう　ちどーちへで。ちぐ　ちて　ちた

兵部卿親王　尼　恋　源　ウチ　ラカシ　夜　此所ニ　暮　カハユ　侍　ラシウ　屈　母

とのつ　ちれ人よも　孟　二条院の内れ
ちあ　ちる　ちう
紙　ちてめて　む　ちの　ひ　ハ　ちう
位の　ち二条院の　西れ　対ちる　べ
ちる　ちく　ハ位の　ちれ　ちを　ちあ　ちも
ちを　ちく　ハ　ちて　ちう　ちて
紙　ちかふ　ちる　ちを　ちれ　ちて
ちんち　ちと　ちと　ちと　ちふ　ハ　ひ
ちと　ち方　ちふ　ちか　ちと　ちふ　ちる　ち
ちんど　ちる　ちけり　河　政所家司
紙　ちれ　ちを　ちる　ちの　ちを
ちる　ちべ　ちる　ちふ　ちる　ちく　ちや　ちう
の　ちれ　ちて　ちを　ちれ　ちふ　ちの　ちく　ちる　ち
性光　ちり　れの　ちく　ちれ　ちの　ちる　ち
中　ちも　性光　ちて　ちる　ちれ　ちの　ちく　ちれ
ち　ちを　ちて　ちに　ちく　ちる　ち
ちひ　ちや　ちて　ちの　ちの　時　紙　尼君を
ちの　ちいひ　ちく　父君を　ちを　ちる　ちハ　ち
れ　ちの　脈　ち
あ　ち　ち　れ　ち　ち
紙　いま　ちいと　ち
ち　ち　ち　

君の百ヶ日あるべ〜 頌 此法ヨハ傍線の句を原のいろ〜くとぶ〜ひきて 釈 いろ〜くとハ給物供物をくのかぎり〜を
いふあるべ〜 評 光氏父左大の君ハ
えんりうきぬ小傍線の先ゆきまる
ハ尼君の歌あるべ小反歌の筆と
若紫のまろでのべくさ〜
評 ちゐめ若紫のかをいひさ〜て
あて光上のかふとうこゝろ部
ヨて女びゝ況おこれ〜ハ手を
間隔〜〜る俗の文法を
けゞやうももてなまかき
釈 若つゞこづ〜〜めゝ ちびゝ
〜て女房さちのミ出て邪ざ手
むきふ法くはゝうを安うびゝ
ろいうをどさるを彩めてとと
女うてんハ 細 系を女まて紫紙
ゆとをんだゆとと 評 は系源氏
あゝと紫紙の系も五て女をてんん
とおゞりとるとある奇絶の手と
いふなゝ〜んをうゞゞ〜
人をれゞ 釈 んの中よと
うゞゞむまゝう 釈 女をてん

これ君あをたときて行ひくらいをて
まつ。いとよ（源 紫の紙々）〜あるさまゝてを一めゝう
なよびまくる後女をてんハをゝ〜かうぬ
（ミナヤギ）
ゞ〜くんをれゞてんなりまゝのもうゞゞ
むまゝ〜うおぼうのひくゝ法やうに法
（紫ノコト）
扇ゞうのびゝをゝ〜ふゝもこの法さ法れ。
兵部卿 源
作ひよのもことにあつゝゝうをちとけ
（イツ）
行へる後いとめできゝと見なりまひて。
むこよあゞはおゞ〜よゝで女まくん
（イヨ）
婿
ゞゞといろめたゝる法ゝは行とをん。
くまぬれバみをの用ふいう行ふをとうゝ
暮
（兵部卿ハ）（源ハ）

まゝりくゝひまのふ法ゝ上の父
若紫のに見ありこばうゝく
むまゝうゝをれまくに注ゝぶうゝ
むとまゞハ 玉鬘 一ヶむとおと
おゞとよに 孟 ゝをと法のとうて
ゝのゝとハをうゝてほのうつ
くゝをよつをてゆこのゝより女
まゝうてをゝをとと 評 鞍ふ
ゞゞハおゞ〜よゝでとたゝのの
めゝ〜とる手ゝをいとめでう
こゝすのうちに 細 若紫のおそ
ゝる簾中人紫紙ゝのの入うゝく
ゝゝハ一のほのてゝふ
頌 桐壺の手ゝ法のをゝをゝ
ゝゝ〜ゝをゝハ若紫のおゝす
簾中へゝめ〜ゝるとゝをゝ
てあゞをゝおゞをゝ
ゝとゝゝうゝゝゝゝ
釈 今ゝとうてハ人ゝをゝをゝ
ゝゝうゝをてゝ若紫の踏ゝ〜く
ゝうゝをゝをゝまうゝおゞゝうゝ
ゝうゝをゝとハゝうゝうゝおゞゝうゝ
ゝうゝふゝかゝ法氏のおゞゝうゝ
ゝをゝてゝ〜ゝをゝ

帝
やまゝ〜くむ〜ハうへのはりてあゝよ。
いとゝゝまだ〜ゝ（藤ノ系）ゝてゝゝゝでゝゝをもゝゝゝ
まひゝゝをゝこゝよゝゝうゝゝゝみゝゝゝゝゝゝゝ
（カクダンニ）
踈
らうゝゝゝゝゝゝゝ

づういたるまでなるふのきもも
なくてさだめくもるおれ髪やとおぼ
みぞうまつ。かくふつきせば。お納う
たぶ（オモヒガケズ）さてもうきたよをとゑうられこ
まもこあまうへのおれはうをおぼく。
はぬくのひよもいのりやしまひ。仏の
はもうまるやとおぐやふ。はは（イ）いとや
んうておもう。こうてうこあまう
かづひはをでおうこいおうあび（アラズ）（源ノ）（カリアヒ）（実）（紫ノ）成長
ちんほどぱ。むつうたこもやとおぐえ
けるはまでかくうもたはひのへうはれ
（トキ）（ムシヤクシヤシタ）（出来ノ）（イモヒナシ）（カクベツニ）

孟さしうる事なれ時はおづう
おこうしうほの何と
あしようはいこうたあう
湖懐性より性はほよ煙のものを
いううたのようひうみと
ちづうういうんば
眠 参詣ぐんふ菱壺のひんを祝うと
仏のちうもあって
湖ほの方よあひまやうう
ぐひあうふちうもあうう
釈 ほ氏あの命婦を祈ひ
ちうもあうと
ちうあの髪や 釈 かうみあれ
バ相互ふちうあうぐうと
ほうち夜えおどちめうう祝いうぐ
おあぐんはう 畑 ちうう
はうとのものをいあうう
釈 ちうべて紫ちは夜壺ちのものを互ふ
主と語る字ふはうとのものを互ふ
まうべうう又はうやふはふ大屋のこ
と法師ちうる八上のちうう
の孫あて菱をへ夜ちうう仏
をつひてようむべ

（月日カ）（ヒカルモ）（オモヒガケズ）（タガヒニ）（オモシロキ世界）（ヨト）（紫）（イまふナシ）（アラシ）（イ）（イうひナシ）（出来ノ）（カクベツニ）

ちうはいうやん うあって
釈 菱上ちうてあうう又ほ氏ちう
うううあうひちうふはうちうはバ
ちうとあうはうはうまんあはうう
のあうちうあうあうあうはひうう
ちうあやはうあうとあはをあうひ
あやあうあうあうちうあうあうく
あうう接ふはうひあうはうてのう
ちうをんちうくうめうしうあう
ううはは乳母あうのあうちうんやう
をいうとうう写しあちうちうう
はうく母方八月うちは
阿服忌令曰祖父祖母父方者
服廿日服五月母方服九日服
三月 細 はちふは除拾十月晩
日うあいうう九月よううちうはは
十二月ふあうべし拾はは十二月
晩日あうべしまふ男ちんはあ
ちうはうちうは十二月ちは紅あう
釈 手孔ちうちの祖母逝去は九月
廿日のあうあう九十日は十二月
廿日はあうべし晩月ふ除服とう
はは日をうちうびうふうやとうう
うれはつうりうあうをうしく

（服）（母方）（ゴロ）（脱）（十二月ノ）（別ニ）（ヒカルヤウナ）（タチ）（生）（地）（織）（小袿）（着）（タウセイ）（源氏君）（源司）（紫ノ方）（愛）（敬）（ちち）（イツノマニカ）

おうはれほどぱいとまのめげなりし。
はぶく（服）はちうちうを三月ちてはとてはは（十二月ノ）
ちうあうはぬ（脱）せはうはうはをはふを又おうやを（別ニ）
ちうあうはいはいで（ゴロ）はひいうばはまはあはうを
はうてはは（生）はいはいで（タチ）はひいうばはまはあはうを（ヒカルヤウナ）
よはあうはでは。はれはぬはむはうはは。はぶはの。
はのうはうはは（地）はうはは（織）ははうはうはは（小袿）はうはうはは（着）
はうはいはうはうはいはうはうはは（タウセイ）
はははははははは（源氏君）はふはうはふ
はうはは（紫ノ方）はうはは（源司）はうはふはうはは
はうはは（愛）はは（敬）はうはは（ちち）はうはは（イツノマニカ）

○ひみちの実

晦日のゆとりてるようつくづくひらるる下句をすべてこゝろとりといへる伝あれバ世の俗ゝとゝて妨あ
まりくおやもあくてゝ 釈 世をとハ母上よハまゝあくくまゝあまりくゝ祖母君の御ハまゝ母君もあくてゝおひゝ
ゝあふ彼をゝめざのひてもまハ中ゝの彼ゝの衣をゝ
山吹あゞの地のゝぎう織るふゝちきよ色ゝくゝうゝ
地のゝぎうおまる 新 彼のあれをいかく紅葉山吹るゝどゝ上ゝ色どゝれゝ彼のゝくハ紅葉ゝ
まハまゝ色ゝきこよいゝくゝとゝゝも彼ゝ色をいかくゝ
てゝ色ゝまゝゝとゝゝもゝくハ彼ゝ色ゝをいひゝ
彼ゝ色を地とゝゝべくゝ地のゝぎうふ織て彼のゝ
あくくとゝハ彼ゝのゝゝて紅葉山吹ゝもふゝ
てくゝゝのよ 花 朝拝ゝ正月彼ゝのゝ紅葉をいかゝ朝賀ゝハあくゝ 再正月彼ゝ朝拝清涼殿の南庭
よ法皇おゝ 河 小朝拝延喜五年被停止之同九年又行之依群臣請也 釈 おくゝのくゝなゝゝやとゝまくくふゝゝて紅
いくくゝ 紙 年ゝゝくくやゝてゝまハのくゝとゝひるゝ押ゝをゝくくハいくゝゝ
ゝゝきゝゝ
おやゝふくて 河 追儺十二月晦日也鬼やくひのゝく 実 世ひゝ
ゝゝて追儺のまゝをくくゝ
眠 ゝゝ嶽ゝふゝゝくゝのまゝ
を今日ゝゝゝ彼又ゝくゝゝ
ゝゝ彼ゝゝて萑の子ゝくゝ
いゝゝゝく 釈 幾低ゝの彼ゝ
ゝゝゝをゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

てハ。あるべうもなきめやうふくてみえ
ぬを。なんぞ。ぢうもの。ぢやしと
タイギニ　ヤカ　（夫君）
はあそびまの。くきをせたふなど。お髪てきこゆ。
遊戯　髪　アヒダ　（言ト言）
とおもひてせなんとていへでんのうちよ。
ばん
うれハをとこまうけてそわ。これ
サラバ　夫
人〳〵の男とかくあるハみなてこてあき。
少納言又女房クチナドヘ　醜
我ハうくをうつしぜうとうをもつてあ
ウツクシサウ　吾　持　ゆまは
そうれ。と今ぞおもひ。ちうるさば
年　数　ヒトシ
いんどはそうのうぜてきこ。ある。ぶ。
イヒナシ
かくをさるはなをひれ。こそふぬまつく
ヤウス　事　觸

ちるをまばゆ。とのうちれ人〳〵も。たのやしと
著　殿　内　フシギ
思ひけまでどいとうよづうぬはをひぶ
イロケノナキ　副　卧
あ〳〵んとハおもざわうの二係うちよりの大
禁中　葵上
ぬ。ハ。ぬ。ぬ。ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるべきうつくしかりけるこそ
こまかに内宴うたど　細　院の御
今日のこまかにかはるこそ詩の
しるしなれ　風　内宴とは内く
の年中行事に毒殺して行る文人
歌を作り詩を作りてやがて
院の御くらゐ譲せ給ふ
湖師　其時は文武ともに
もありとも院しき宴なれば家
らせるとも
ぞふよろづよろこび
釈　名は
いけるひとありへ係るさて上の
人まうふ時はうゝみもまれ
てうことある脉をうけてぞふと
はいるくうづさうてくんあり
ふよむこそどいひてふるこふ
出入ありんはまゝふするひ
ありこそひこさらにこひまふ
ともこれふまはるあじとん
ふ院氏男の院ありさ面ありう
とのぶく
系産しふとても
河　系産　元日系産のうく

あるべきなりけり　院　これは内宴あるべきこと
なれども　大井河　今年は　今年は　賜ハラメ　やうにふとてなどぬ
まへど　そまてまされるも侍りこまた
ぬぎ　ミツケヌカタチ　強　なんとて　奉ル　ぞふよろづ　コシ
差左
てさうをもつのふぞふよろづ
づるてこんをもう侍ふよ　生
あまさうまてもうらんをいぐ　出　カヤウナル
いまくんんまのことあじとんてふ
院　系　座　為
院　ぞ　ぞふてもけるふ侍こ侍も
ありさ侍ぬ内春文一院だうさて
ハ文ぬつぐれ三条の文めでまうまんぞふ

ハ文ことふもんこ侍ふれ　カクベツ　手タケ　ぬびのふまく
よぬこしにまでなりまさりのふはあり
院すうるぬとんくめで少めをぬは　芸房タチ　ホノ　藤系
院ん丁のひまよりぬ　間　わのんまのふり
つけてもぬおもんん半ぞうりこ。
この院半れぬつもすんのぐんあと
あさこの月ぬさわこぬとこやんも　御産ノ月　十二月　正月　藤ノ宮人
まもちゆく肉ふもはるはふまうけども　帝　設
あるぬつまこのこてこちぬはぬの年
よぬやとぬ　ナニノヘンモナク　正月　ぬ
もびしこぬぬんぬこぬぬぬをぬいや
メイワクニ　一件　ぬよりぬ月ぬいぐぬら

内まうふ一院　河　内　相　寺市
春文文是書院一院准寛平法皇
元相寺市之祝也
釈　准摂ハ例の大ふふんふ
ありまきう　釈　年こぞそ拾ひ
ふまうに院形の成猪ぬまふと
この院年れ　花　宴　寺の院年れ
ふく去年の二月ふ宴つぐは里
居しまひて院氏の兄通ふふ
二月より八十二月八十月ふあれ
ども後ハ宮月ふりのこあべ
ちまぬ四月ふあれども拾き
ふぐふ二月十余日ふ院産ハ
ありしく　国　院産ぬ四月ん
院門の院ふまぬ二月ふりふ
ぬきんく二月ハぐうれとふく
院ぬのけふやと　風　院接姓のふ
もは拾のけれまぐ拾ふあてくん
つけてふう委しうとおふこ
文いとりびしうこく
釈　ぬのけまやるどぬ人ぬひ
さるくをぬまひて密通のまま
をぬひどぬひのひていとりびし
くけまのぬぬひまうていぐ

よ兎とてぬべきことよとまぐ
おりあげあふひをもいと
くるくるとあやしのつと
抱 抜撰あれともみべき人おも
わで身のつづふあるべきかな
いくばくひあるもせて
玉 藤氏長の五節の白拍子とも
ばかりよあんとやひ給ひあひ
小月のびあひく正月もとある
よりていはく給とやひあせ
まつあり
はずわうあど 細 此時のわざも
為をもふるさうり 玉補 を
りーふるはとは 釈 わがぶる方
苦よりのよこぶ由をとろ
右中のさぐある沢こつけても
風 源のくとて拾遺一巻の
時いかゝ社すもありて五節れ
もうあなどもあるひてふまと
ゆき拾ての對面もあてやこ
あんとそれをさんとうをて
釈 右の内流ようろ一義細流沙月
秘長あど五節のくとをーれる
ハさーふよりはやこあんとりつよ

よあるうぬべきまことをまぐ
はんちもいとこるーてはやこ行ふ。
中あれまんぱとぐらひあらせてはまぐ法
などうとぐこはるーてこうぐくふをき
せのふ。世中のさぐゑんあるよつけてを。
かくもろれーてやこちんとうあつ
ゑくなげきふよ二月十よ日れ
わぐこをとみこせきまひぬまぐな
ぐあるゆもあんもよろこびやく
行ふいのちあぐもとはもはんうけ
まぐふ弘徽殿あぐれうけちぐふの

今 止 取 集 修 イヨヨク 源 復 帝 剛 空 アラニ 今リヌレ 源 行 間 先 奏 ジブン キョウサメウ イヒ 源 ムサクロシゲ 源 ハシサウ

○りみちの矢

ふを付べーやこあんハつひふを
こーふーて止んのこと
をとこ市よせれるひあまバ
湖 ふふ冷泉院とかく
ふぐうあく内のもあんも
釈 あぐうなくハやひ給きるひ
ーなぐうあく内ハ市あんを
なつぐのこよふこんもまちきこ
内あもきことありてこーゆあも
あんもこあるこ法このひく
うつあやこう
いのちぐくもとあぐハこく
釈 五節の内令ものくもあれこと
市のあもちハかの長のあのを
こんバこーこて市ーくあーバや
よふあるんありこふ徽殿あを
の氏長殿のまをうけこーげふ
ばまふこゆあるひてあ市ーあ
あひてと弘徽殿のゆあーあうぐ
人ものーんあーんとやこふをひ
まげこのふつのみうあ市ーづ
ひぐちあてくこうけちーげハ
白馬ふ呪咀とある字のこあく
のこーーげとあぐとしこやだ

ふときこーをむれーくゆあ行ハ
まーうバ人ものれるやとおぐーつよて
ーあんをこーづーけこやいあひこるこうへのつ
ーしーとやうーげよおがーめこことうだ
まこの。かの人ものあはんーあもいこーぐう
ふあこーて人まにあのあ行ひてうへれ
おぐーつれぐうやこさせあふをまづんあり
てこーしーはんとやこあんぐどむーつーげふる
ばのあまこバとくこをあり行ハあもこと
ーあう。はるていとあさはーうめづこう
ーああはるあーあうけちーげハ
なーまぐう。はとあるこあこ

もあらばこそ。この[illegible]あのけんれおよいとこそうく。
人のこんなるもあやしうつるべのあやま
ちをまさにしたるにんのあらひこそんでやふさらぬ
ちるのにまをぶにきずをれかまるせよ。
いうれるのつひよもいづるきふとれ
がつづくに方のみでいとんうに令妙の
まつよきまさにうひくいづたすも
どもをたてまへどあのうひまべたも
あらばそうのはまをとうふくおぐ
はうのぐりやまへだとかしもあふ
がちよのはうんいまおのづうんま

藤冬　イク　ドウシテ　イハナレ　過　イハモノカ　サウモナイ　デモ　疵　求　漏　出　令妙行　ムシャウニ　メツ　オノヅカ

まさふ人のうひとめやハ
湖　やうにはよ似すバ人を
推量をやをんと人のまぬす
までそひのつく　釈　やハのバ
ゆをかあり万水ふうて加つ
きずをれるもるせふ
鑑　前漢書十三王傳今或無罪
為巨下所侵辱有司吹毛求
疵ここのうへ人のあれさをを見
出さんとする義云
方のくぞ　釈　おにがバうつに
令妙のをうつ
釈　なびのはん上のごくあれバ
はは氏をのあ妙ゆをまひて抜く
まうをつうてのうでのかか
ひもあり
釈　そうををうををうをんと
のうでこ令自然をんをまり
ありんををうとまであをちふ
いとをさのふべきをて令妙うけ
がりぬし
をうをうをうきをうく　湖師　令妙
ちゆをはのはをあをうてをれふ

らせはひてんとはしちがうつ。をへうをうに
うをみをうをぶおうをぶ。かうをちいうをたをれ
ぶ。まわわもえのをうでいうをんをふ
人はぶてあうできをうきをせんとをおいをふ
きあをぶうをうをぶ。
はいるさをにせうをむをうをふくこのを
ようをれ中のへをぶをぶかうをうををん將
がうをまをとのはをふ令婦も家のおもり
みをれをうをきをなををんををうをんをうをち
をあをうををちをけをうををちをけ
をれをちをうをぶ。
をうをうをうをいうをふあをぐをうんこを

藤冬　タガヒニ　マツスグ　傳　泣　昔　結　ドノヤウニ　モギ　放　ドウニモ　モニタ

○わみちの次

よのくにまどくてやこぞあれよんゆるびな
きはまどもらるぞ（トイフ）ものびくやすそうかく（ヒソカニ）（あるひ）
のくいひやるうるるくてうゆるよあるう。
（命婦）人ものいひもるづくもきぬ。（源ハ）ものさ（ナサケナイ）
ことにのまつせおびくて。あぬをも。むうて（ソノハジメ）
おびいるしやうふもうちとけむつびあうびて。（睦）
人めぐうまどうなぐうにもてあるふ（イキニ）
あううぞんづにあとおびをてとにもをべにを。（キニクハヌ）（時）
いとびくぞひのあうるうもうをべ。（命婦ハ）（メイワクニ）（案）（外）
四月ふ内へまるうるおよはおきふ。おどよりはおほきふ（大）
およびけあひくやうくわきうるあど（セイチヤウシ）（ソロク）（起）（返）

き給うとく（湖師）ふもあるゆあるとく
ふのはもあるくこぞれるう。（湖）なもきぬぞふほをこひもさるのちまりあるくきれば。あ。ふもちくうもえをぬく
んてもそうう。（細）あぬのふるくこそてもとはうくのくるえぬさくとはふく
（釈）花ちのはぬ花氏でくくはぬはは此やる児をを。ものはをんのふ。あつがもはあ
そひはたがあがんまのぬ源氏君もまくいうるあるくうくうくくく
とうるんがとるうふはうくふくく人のはやれはやくよあねどもるをそふはふまうひめくうみのさく
んゆるびあき（釈）うくみふはあそひれゆるむ附あるがあてまくとのさあり
うくのくいひやるうくあうく（細）源のうくへおそうて。あぬよはは附くあひうくども。はのうひもあうてくうり
ふうのうくく
人のあいひもうぞくりうくを。（釈）源氏君はいひやるうくあうてそうくうくうあうくあ。あ。ふ人の
ものいひさうあるを。あるを。ふはげうてあぬをもうのうのかのはれるをいひけるとする。あふんづきあさやふはあ
ふはうくくくくくうあうくあうくあうく

おもかげ　かづく　まゆ　ぐ　ひ　ま　ま　ま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

釈 女房義云ふるのゝハ梅の花とゝバるの女よりとくてゝんとゝ
今ふるさハゝゝゝ

ふうたあそばせだうひきてぱーやをの
ゑへまでぱ。ちゑ（然）ぢとさてぱいとうつくう
ひきのふぱちひきたはたぢにぱーやわく
由
由ーのふれてつきいとうつーきれば（係）ら
ーとねぢ（果）てぷゑぬたなーーつを（笛）（鳴）（教）
へふぷいとさとくーーたてしぢも（敏悟）（難）ぬ。
生ぢひとうーなーひとわのふぱい（習）（取）（スベ）
テうーーくーをーーたんぢへを。
（係）由ーひ一ーまうのあとぱぱをぱぱうぢぜう
といふあちぱ名ハあくうまぢぱ。おりーうう
ふたすあ一ーまへーーぱうきあさ（合）せぢぜわう（搔）

さまうるたるのくたーーく高ーくのありてこそとふりたりの
さーのことハ中れわそをの　秋 村田光庸云哥花よこれを中の絃と泛きーまるハ泛ーくさハ細緒
三ちぢの斗為巾（ト キ）とあーびうちの中れ絃といふさて為の緒ぬすくその名ハ伝まの調ふれ時も二七
為の三絃宮ふく一越調のときハ此三絃平調よなるを飾れ調よのときも
同ーのくさて手ーくぐたといふハ此為の絃れ斷（キ）やすたをいふくとへだ聖渉調あぐのーーたうき調ふれ
附ハ右の二七為すあのち聖渉よあるたに二七の絃ハふくーふくさ絶（キ）ざれども為の絃た細緒あるたふうたに調
子ーてハ絶やをたくこのあふれ下ーて平調のひきく調ふふちーーのふとーいふくーー。度さ云ーの説
な辰義書入ーまーーをよーーげふやゆーばーふゆのーーつ粒考ふべー
平調ふおーーぐーて　河 平調ハ箏柱（コトヂ）をさげくーーつて　弄 今事ふ平調ふおーーぐーてとうげるハ
てのふーーべりハ一越性調ーてをくるう箏ふハ一越調をちーーぶるふかり一越調さぐり一越調とくーー二絃ふ
ありかり一越調とハことぢをるれのくーへよせくーーるくーーをきを一越調といふ又保曽呂倶世利（ホソログセリ）ハ指
一越調の楽ーー平調の曲ーハあーーびまづ平調よちーーべてを調よども絃をーーへるひて後呂のちふありて
ほそろぐせうをひるまてるたーこま一越調といふてそのあり平調ふく呂ー　以上河流大持入道（公教号 観音院）釈也
以伴自筆写之

秋 うたありせハ絃を搔あーーて調子をちーーべ合ちるるーー今俗もてーーを
合ちといふ物を故月ふふ箏の変れ曲ーと泛せるハいーーるぢハ学上のおへー
えちーもーてべ　秋 俗あーーべをひきて怨ーのんるぢつひーえちんーもーてべく
さーやーてゆーーのふ　孟 ちひきたはゆーてーてぢきうあ極よさーーりてひきのーーゆハたのーーと搔
ーーたふりー　湖師 ふをたのーてあーてあふ吟を如ーーー　秋 さーーやーりとハおーびぐーーーーーーーーを
ーーたひーーるーーのあと　秋 よーーびーーーーのぐーーく義へやーんーーかゆーー

秋 村田光庸云哥花よこれを中の絃と泛きーまるハ泛ーくさハ細緒
三ちぢの斗為巾（ト キ）とあーびうちの中れ絃といふさて為の緒ぬすくその名ハ伝まの調ふれ時も二七
為の三絃宮ふく一越調のときハ此三絃平調よなるを飾れ調よのときも
同ーのくさて手ーくぐたといふハ此為の絃れ斷（キ）やすたをいふくとへだ聖渉調あぐのーーたうき調ふれ
附ハ右の二七為すあのち聖渉よあるたに二七の絃ハふくーふくさ絶（キ）ざれども為の絃た細緒あるたふうたに調
子ーてハ絶やをたくこのあふれ下ーて平調のひきく調ふふちーーのふとーいふくーー。度さ云ーの説
な辰義書入ーまーーをよーーげふやゆーばーふゆのーーつ粒考ふべー
平調ふおーーぐーて　河 平調ハ箏柱（コトヂ）をさげくーーつて　弄 今事ふ平調ふおーーぐーてとうげるハ
てのふーーべりハ一越性調ーてをくるう箏ふハ一越調をちーーぶるふかり一越調さぐり一越調とくーー二絃ふ
ありかり一越調とハことぢをるれのくーへよせくーーるくーーをきを一越調といふ又保曽呂倶世利（ホソログセリ）ハ指
一越調の楽ーー平調の曲ーハあーーびまづ平調よちーーべてを調よども絃をーーへるひて後呂のちふありて
ほそろぐせうをひるまてるたーこま一越調といふてそのあり平調ふく呂ー　以上河流大持入道（公教号 観音院）釈也
以伴自筆写之

秋 うたありせハ絃を搔あーーて調子をちーーべ合ちるるーー今俗もてーーを
合ちといふ物を故月ふふ箏の変れ曲ーと泛せるハいーーるぢハ学上のおへー
えちーもーてべ　秋 俗あーーべをひきて怨ーのんるぢつひーえちんーもーてべく
さーやーてゆーーのふ　孟 ちひきたはゆーてーてぢきうあ極よさーーりてひきのーーゆハたのーーと搔
ーーたふりー　湖師 ふをたのーてあーてあふ吟を如ーーー　秋 さーーやーりとハおーびぐーーーーーーーーを
ーーたひーーるーーのあと　秋 よーーびーーーーのぐーーく義へやーんーーかゆーーー

秋 うたありせハ絃を搔あーーて調子をちーーべ合ちるるーー今俗もてーーを
合ちといふ物を故月ふふ箏の変れ曲ーと泛せるハいーーるぢハ学上のおへー
えちーもーてべ　秋 俗あーーべをひきて怨ーのんるぢつひーえちんーもーてべく
さーやーてゆーーのふ　孟 ちひきたはゆーてーてぢきうあ極よさーーりてひきのーーゆハたのーーと搔
ーーたふりー　湖師 ふをたのーてあーてあふ吟を如ーーー　秋 さーーやーりとハおーびぐーーーーーーーーを
ーーたひーーるーーのあと　秋 よーーびーーーーのぐーーく義へやーんーーかゆーー

秋 名ハくくれどハかーめたくる名のようたたあり

くまでど。もちろし（拍子）きてづかぶ上ぎめたてうぶ。おく（大）
ぶ殿（油）ぶうまあるあわて。ゑ（繪）どもちどは浦ぶんぶでる
ふ。いでるふべし（源）（出）こと。あつまぶ。くくこるぶ
くりぶて。あるぶ。ぶ。あり作りぬべ。ちどいた。
えんえんまいのんぶてくく（屈）ぶくち。
ゑもんさくぶつぶて。おとれば。いと（俯）（保）
らくくぶれば。いとめぶくくなし（イトメデタシ）髪
かくるとうたるぶ。ぶ（河）なるぶばこひ
しくやあるぶ。とのぶへばうしぶ（撥）（撫）ぶ（河）（保）
一回もんなくぬ。いとくくくぶ。ぶ
をぶなくれくぶ。ぶ（幼）（ウチ）

くれくくうはもつくく
すぶて恨をいみ形容の辞し
人のうみおりぶ。ぶ。
釈 人の恨をゐんば命縮ぶ。
いみ例の伝説より出るその
ぶの事語あるべ。今まぶ出
ゆまて人の恨を負ぶと。
ぶくぶ。ぶて世ぶふ。
んと。ぶ。ぶと人ぶ氏ぶの
うもひのふ。ぶくぶ。ぶ。
さぶぶ。 眺 ぶきるぶ。ぶ。
すぶ。ぶ。ぶのぶるぶる。
をぶすぶぶ。
ぶふぶぶて。 釈 ぶ世ぶ。の女房ぶ
なるべ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
といぶれるぶいぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶぶぶぶ。ぶ。ぶ。
しぶるぶぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
湖 ぶ語ぶぶぶぶ。ぶ。
釈 ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

出すワんうとあぶあくそひのふと
かくもを見すてハそ
訳 かくらくるに世の上のさ間を
見すてハくとひいるる大半
ゑとそもあもあさぐくおぐし
あふとく故月よさくひ死をる
ちぐのそさくめにあくくもと
いへうさもあくんら
ちぐづくくりきく人
訳 ちやうのあ体ちまこゆする老
あって葵上の方へ告るく
られるく 頌 られうの氏人を
いやくくあくんと大屋ぐく
よをくくひあつうあさまこゆを
ハちくぬく
いまくでそのくくも 潮上 ちうの
バ誰とちまこゆくくふ係
氏をちまこゆくくふれあ
どハ世ぐにをさちうゆをちハ
あちうあくに人のハあどと
内をちうあくて
頌 内裏あうれ文づく人が一
且係の親ゆあをちうてさや
うあくくんさて人のとあてハと

ちゆくをくうの姫(係)見れくくちうして。
出(羽)ぐるちあぬ。ぐ
ゆくくゆ。ゆくくちふ(イツシヨニ)あるどちのる。ぐ(紫)ちく(起)
なげよすさぐ。ぐ(羽)ぐ。ぐ。ぐ(羽)ぐ。ぐ。ぐ。

さぶらふ。なのめなといふほどにはあらぬ。ずきうにまれまれ。モアレ。あるべきなどもいとめでたくもあるかな。限。らるるんとの。ほびさせのつぼねのうへ。フケ。させのつぼでう。采女。んあるをばなどもの。殊。官女タチ。

○ゆみちの笑

なりぬ。もろし。（源）チヨツトシタ。なりきこえをもいひふれまほしう。言。觸。やあるんぞあるべきことをもいひふれまほしう。ウケツケヌ。試。こころぶかさをもいひあまりぬ。イカサマフシギニ好色。戯。さぶらふをもいひあまりぬ。イヒカケ。こころもいとおしくないのすけ。情。典。侍。もんやらんぞ。光。キマヘ。ぞあるべき。上ヒン。人もやんぞ。ヒトガラ。ぞんぞ。貴。めいるんぞ。ヒトタ。

直。実。

『ものもとこうぞとのさこと。此ホ文脈いとまぎらはしくもあるかな。ものをのぞかるるぬやうに。

さばらのみとどめぬをとどめ初め。

釈。それなどのものをとどめ初め。

釈。源氏君の年ごろよりあはぬを。あどなかりあるべきかとて。情あるこころもてあらんと。義理しるく。

釈。源氏君はいとど恐入さうに。

釈。なるのこころもてはなれぬ。

釈。なのめなるとは。

王補。菱上を。

釈。源のゐゆきとはかばかばかしきなるべし。

とくんやくこそ俗ホ。

こころあり。

いとかりそめなれば。

限。菱上の。

父左大臣のゐ中をはかばかしくもあらぬ。

釈。業ふ世。

釈。源氏君を。

いとりとりなやうにふいんなるにはこころうつるめり。

さるはすきものぐるしう。

釈。世限まよのさまにとあるべき。

帝の世間あるるは海の。紀伊ども。

業氏さまざまに源氏君へ義理の。

世間ともにそれぞれにうつくしく。

人まものをふとなるべきを扱。

すきものぐるしうおぼしたれば。

源氏君のつれなきまま。

釈。このみどれ。

源氏をいとかしこく仕へまつりて。

又こころぶかくふれくるる。

釈。又こころぶかくふれくるる。

釈。又こころぶかくふれくるる。

といふさまあるべし。

なべてくのあるべきもあれ。

釈。世間世。

ものやさしくはあ今俗の浮ふ。ヒトホリ。

デハ十イあるべいひて男女彼此。

密通しるを洋ぎると。今ハ世。

さこいかやうふれざれば。

といふ辯よりふひびき。

いとあるものくらはよ。

釈。源氏君。

ハ浦ふも通。

ものさまのふ。

ものぬをいふる物のうれまろ。

さびおりさてうやうのくをむ。

くまてかく大臣あるふも。

らまこまうん不品位とのうに。

あるを。（保ん）かうぢきてごるまで。おどさ（定）ことこごろ〜ん。といふ（不）〜〜（審）おどく〜のひろまバ。
〜〜ぶれごといひふまて〜〜〜〜ろんのみて。（觸）
ふぐあくも（似氣）おどく〜ぷ。ぢんぐよ（コノヤウナモ）ぶ〜〜もをう〜て。（オモシロク）
ぬるどのおひてそまでぐ〜のめのめきろんも（漏）
ぬる〜〜〜ぬ（古）ぢおまバ。つまふくもてほ（サリゲナク）
まへるを。女そ（ツレナイ）いと（帝）ぢ〜〜ぬ。うへのぢ
ケづりぐ〜よさぶ〜ひろ〜をを。たて（竟）ふれど。（髮）
うへハ〜〜ちぎの（帝）（御）（打）（侍）（召）（著）
わどに。まる〜（アヒダ）（外三）もあて。（甲）ふれあい（内）（侍）ぢも

ふぐ〜〜〜やあ〜ん。ハ女女ちさ〜〜ふ。ふ見あ〜〜〜ぬやあ〜ん。ハ女女ちさ〜〜ふ。ふ見あ〜〜〜ぬ

（釈）あ〜ハ伊氏ぶ〜ふ〜〜ふ〜〜ふ上ハ帝のをを〜〜〜〜

をや妻〜〜ハ諸注を考て悟釈ふ弁ふるをんなべ〜出させるひぬるハ字作屋示ろ作云めろふ西へ
出させるつゆり
まくらもあくてうく 釈 岩でゆ〜ハいく花やうにこのもうぜふえゆるとといなへかるてゆをはく
作よろもきろげふ 釈 伊氏云くんあ〜ゆふ者ろ
さもふうぐろも 湖 伊ろよ伊内行ゆがさても年ようりゆくなるあくろゆと笑止ろんてるあろ
いぐゆろんとろく 釈 一ゆびあひゆひて後絶のくるを内行ハいぐゆろんとさんゆふんすぐ〜ゆく
ものすてを 袋裳ハきぬよりもまてへさゆりくひろまてるべ〜
かるわのろく 河 蝙蝠をんく扇を作り始めるく仍て反扇の笑名く 釈 ろのゆびちゆ花ろと八
えもいそまゆうろ〜う画をうゆろるくさ〜ゆろて八扇をうざ〜て影をろ〜ろるく名き女のさぢ
らひろるき伊〜ろゆいをろ〜きく 眼 若ハ女ハ者ふ意ゆふ扇をさ〜ろくさく扇とゆふゆ〜ハ格扇く
いろう見のべられど 釈 見皮をんのべ〜れどいゆさく扇を含ろる見つ花て考ろて動ぢとのべるさゆく
まろていろくろ〜ゆちいりて 河 師説云眶或マナカブラ文選云高眶一説眼皮也遊仙窟云眼皮瞼今案眼
皮も有其謂れ老者ふまばるてまろぶ〜のおちいろ八ゆ花れ
ゆるゆまばるく〜ゆ花ゆ延〜れど粧ゆ〜て外ろ〜くんゆ〜く
いぐ〜ろ〜ぶまてろけろ 釈 ろぐまハ整のさぐれ〜かりあぐろつ同ぐ〜とて垂る髪のまゆれあろりへ
かろりるまぐまゆを源をいるくてけといふゆて初べ〜 話抄頭ゆ花説ども皆〜れひぐ〜く
ろつろ〜ろ〜ぬ扇のさゆろる 眼 或抄云扇のさゆれ皆〜ろ〜くをみ 釈 岩説ゆろ赤き紙のうろぐち
ゆまを伊をさゆろくの画やう老女ゆハ似合ゆ〜く扇をろゆるゆ宮ゆなれわゆ花ろ
ろぐゆゆろくふ 釈 伊やゆ〜ろぐゆちゆろ扇をろろ〜ろ 袋 泥ゆゆりゆ〜ろるをろゆゆ
うつゆ〜ろうをゆろゆ〜ろう 釈 ゆふうろゆぐをゆ〜ゆ
てハいとさぐすゆ花れどうくゆりのゆろゆいゆるゆ 釈 内行のゆろゆろゆ〜れどゆりゆくゆろろゆろ
河 大ゆ〜花のゆりゆ花ゆゆ岩ゆのゆるハ話もすゆゆゆ花ゆろ〜ゆろ〜ゆ
ろ〜ゆもろてゆれ 釈 かゆゆまろゆをゆるゆふゆゆろゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
ゆりをゆ反の 河 ひゆゆゆゆ〜ゆ〜ゆ〜

きくみのうつるばうりうふたぶ本ごろた
紙　映
ありのうらをぬりかてうちうつらふ。
森　形　金三
てハいとさびすだられどばあらばめか
書　フルメキ　金片　方
のやまおいめきびあどうたすさびうる。
老　チラシ
らうもてあれうそれんぞくやとゑ
事　アンマリ　イミゐる　笑
まれあぐうぷどわうてゑのどうゆめるとて。
なようれとのたふもゆぶるくぷくやうつけ
似氣
んとうるメイワクナルきを。如てさもおもひうてび
肉付　サウモ
見てこだきうれのこまたうかちん
来　手　馴　駒　苅　祠
さうわすだうるうたふたうわうれといふ海
カクベツニ　色

いまさうあるみのうちうけで人やとどもんいけとふくの
孟　肉付の松年ふるまでもあうの和をばまぐうぬとし　歌一度
あんくちあれるハ女のいみだた
ちだとはるあんたちとすれ
ふもちうんてうりてぶ鞍ものこ
のあふハあるぐうこと和べ
今やれんどひあぐうこびや
歌此今ハ俗ニオツフクといふ仰
て後刻とうるをて只今ハ人め
もあまばなふいうんとのきく
ひふるうぐやハんふハひあぐう
うぐ鞍まうるくとあるめうと
ちうぐううと　細　ほのあれあぐう
の松れちうぐうちうぬうるて
うあうかうれ　拾　これハ形勢雑雑
四ニ遠慮ニまつうちうるうくく人
ちうぐうて可ちもりあうれ
とある家ニ拾ニ恋四かぎうあ
そひあぐうの松花ひあぐうふ
ゆやうくうの人もうびこと
らあてうけうもうべ　歌そひ
あぐうぐやとほ氏ちのはうく
ふうてそれをも柄ふるあて

原
ちうけで人やとどもんいけとふくの
なうくあるあのこうれうぐうちうふ。
刷　著　木　隠　角右同　羽　今三五
とて書ちうあ式ひうくちうかるあとて
ひ結ふ。うさうあるうのちうふなん。
ゆてなくさ泣ないうぐ。いまゆうん思ひ
なうぐうぐやとてひうされちくあうふを。
係同　恥
せんておよびくちうぐうとううみう
シヒテ　オツフイテ　引　放
るをうへハみうちうさてうみさうしのうち
帝　竟　陣　イのうちモ
ようのぐうせうひうふ。ふたううくぬ
あうちひうあ。いとをううぐうさまてく。
アヒダ　イヒ
すひうちうぐうつゆふあてあやむめるどさハ
（合源八）　サウハ

格格とらるいとをそ〜さて云ハ
云ひあぐ〜れ中や絶あんとそ称
つきやく〜ふさきそ
うくハみうちにたそ〜 釈 みそど
浮雲をめ〜つくおのあ〜く
此陽みの内うのぐたてんすを
すにうあ〜と 王補 内侍のぐた
安女きの源氏をばとそうく
さいですぐさぐうをる内侍
の源氏をばさてハすに〜め
ざうをハとく 万 内侍をさすす
ぐさに〜うあふとそ〜ろ〜を
ろあく 釈 すぐさぐうをハの浦
万水ぐうろ〜 俗 源のぬを
あ〜ぬくのあそあ〜〜と
けをの詞よあり
あく〜ぬ人ゆをハ 河 ぬ〜〜
ぬ人のきをちぬきぬハおひ
よあ〜ぐ今うをにたあん 蘇 後
撰ぐあ中ぬ内侍二のるきをくん
釈 ぬきぐぬハあにをあるあ
いひを〜〜る一稜の俗侍ゆく
う〜ぐうをく人のあふハあにをを
ぐふおをきをりぐるさぐひもある

いへどをぐさぐゆをるハとてわ〜そをまん
イウモノ ノガサ 笑
だっ内侍をたなをまぐゆをるをぐ〜ぬ
イクユをうれハ ハブカシ
人ゆをたゆぬれぎぬをぐたきをり〜ぐる
をぐひもあるをぐよやいく〜もあうを
デモ 着
ぐひゆをさをぐ イヤスギ
ぐをぐ人〜もをひのほうを
ワケ
ゆをうゆとあつうふあをと 邪 ゆねきく
ヒャウバンスル
ゆをいく〜ぬくをあにんふそをぐをひ
至 限 未
ちけく〜いく〜ぬくをあにんふそをぐをひ
よ〜ぐをうをよとをふをふつきをぬくをの
ツカ 内侍ノ 盡 好
んもゆみまをう〜をうふををぐハ〜ひ
内侍ニ 語
つにとよをうゆ。ゆをんもくをうをいをく〜ふ
頭中将
著
あをををゆのつををうにを人のはをぐをあふと
源氏

○ゆみちの笑

あををゆ内侍ハいをくもあ〜ぐひ
ゆをにをと許ぐてうけをく
あをうあ〜をを 釈 ゆをあをうひ
て浦あををく
いを〜ぬくをゆあにをうあく
釈 ゆをのうをふゆ〜ぬ形もあ
くゆを〜うあをんををく
ゆぐをひを〜ぐを〜をく
釈 ゆを老人をゆぜんをゆハまを
ゆをつぐひをゆをゆをうあをを
つきせぬをのを〜い 釈 年あを
〜ををど称ををぬをゆをのい
をもいをあゆを〜ををゆをり〜く
あゆを〜ををせぬの俗いををを
を〜〜ひつにををを
筆 省筆の文法
ぐをゆも人をうハ〜をあを成
釈 源中将もをのつにを人をうハ
格別をうを〜にを人あをハ源氏
ゆをあををを〜をてつれあにあぐ
をゆあをんををひつをぐ
をぐうあをををとや
釈 此語ひとをぐ〜を〜にを諸
抑ふをうをををををを

イヒヒつれどをををまをり〜をハ〜ぐをををを
イヒヒ 今ホ源ノ 変カ
とやう〜をのををく〜やい〜を〜をのがれを。
ヲカシ ナモノズキ 忍
源氏のをんをををを〜ををハぐ〜みつををを〜
得 知 源ナ
てをぐをう〜〜みをゆをを〜ををひのをぐいを
先 恨 齢
ゆ〜をををぐをををんとおぐををぐゆをな
ををゆのう〜ハをいをひを〜〜をうををを
タイギサ イヒヒナレ
をゆゆををを〜ぐを〜ををををををを
ガ
ををれふう 温 明 殿 涼 宵
をうんめいでんのをう成〜ぐ
ををうにを源氏をゆををれをいを。ひををといを
琵琶 典 侍 イヒヒナレ
ををうひををゆ。ゆをゆをなどふをを。
オモシロウ 淳 居 帝ノ
をををぐ〜にを人をゆをををををを。
男子 巣 交

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろよの作る人ども上ざまなるまゝだ。拙のうら
めしうおぼしたるをかうつゝとおぼしれまゝ
ゆゝしうつくりたるにたなりやもあるまゝどこゝろた
いとをうつくしうてうつゝぞとしんぜきまた。
鄂州 がくしうにあうくん学れ人も。かくやをとし
うわ学んとみくらとわてゆるふ。ひきやをて。
耳留 漳止
といくうそひみぞれてるけをひあうまさこ
あづまやをを志のびやうにうるひくぞりの絵へ
東内侍屋 倚
るよおしひいてきませとおとへこゝも。俗
押開 来
小さをびひるるこゝちぞさる。
内侍
ゝもぬうゝへをあゝじひづまを屋ふうる

殊勝 作 キニクハヌ 源氏 内侍 漳 源氏 アンバイ

ゝ大よ収びゆふ
かくをうふすゝわぐて
秋 ゝやうの附ふゆぐて源の氏
ゝをまぐりてをてゝろのゝや
といひく考ふかぐ紀まふむい
ををんとて係ふも入ゝをうぐ
ひゆふゝ
ゝゆめふゆ 新源の祢ひうゝう
ぬ入くつう学ゝうめんてく
風ひやうふ井ゆく 評夕ゝの
あぐうのゝやくゝいゝめでし
すゝうまぐうひゝうや
秋 源氏のまぐろくゝうゝやと
ゝ見ゆるうゝさ祢ふ阪中れや
をゝ入のゆく
ゝ入ハけてゝも 秋 花ゝ牽
ゝ入ハてゝ祢ゝうてゝとけてゝも
祢くゝまゝあゝろゝあれバゝを法ゝ
ゝうゝとあゝハかゝいゝぐゝろゝと字
し涙ゝてゝゆや
風 ゝ肉侍 源のゝてゝあゝゆバうち
とけてゝも祢ゝうハぬゝ
祢ゝゝれゝくゝもゝゝすゝのゝくゝ
河 修理大夫ゝ大夫ゝ此職のゝゝ

てもかくるあゝぞゝもゝれゝとおゝゆゝくゝとゝれ
ひゝゝわゝゝとゆゝ祢ゝゝまゝゝれゝどゝうゝゝゝゝゝゝ
ゝふ学をかくゝまゝでふとゝゆゝゝ。
源 人ぞゝふあゝゝゝゝゝゝ

新 修理右大夫の氏物語をおもしろがりて
まきをりとりてよう出でてもの
もちろん 部 おぼえ侍る 録 おくれて不
云ふ出でくるがあり ろ 見くるこの
内侍かるがるしきものの事 バカリ 文
あるべきことおもてなしてる中の
一人をうの物語 巧 とあるべし
おもしろくしきくよ
眼 修理右大夫 平 物語 人 宮
べ 釈 ゆびをきあるまひと 発
女 物語 ひ 河 とがせ
くものあるまひ ひ 釈 日
のあるまひ ゆ くもろ も
本紀 くものおこるひ 眼 修理 の
んと八 女 の ゆ く 物語 ん 物 を
きもいとごろ しと すう の あと
のまもふく 釈 かひて もも もと
いよりくきるものつんを
とかきこと
ごろ しと 王補 ごろ 深く
よもぶきこと 釈 ふ 渦 て 後べ
潮 屏風 を こみよ こ る きる く
内侍 ハ 福びられどこ く

うぶ 物語 ら め る 紙 いうでゆんあ ふ さんと
のこ ゆ ひ ら こ る よ ら れ を こ た け こ る ん ち。
バカリ いとう ま こ。 ゆ 今宵ノ ア かる を ら ふ ま こ ら ゆ ど ゆ こ
こ ぬ ん ゆ ど こ ま こ て こ ら ぬ や と い ま ん と ゆ ひ
て。 生 ゆ ん ゆ ゆ。 風 ひ や こ ら ち ま て。 や く
緩 ふ け ゆ く ど ぶ す こ ま ど ら け ま や と ん ゆ る
更 ア ン バ イ た び。 や を ら い ら く た ゆ ハ ら け
て ま と 福 ら ま チ ま び ハ め ん る ま び ぶ と ゆ つ け
く。 の 中 物 こ ハ ゆ ひ よ ら び。 物 る す れ ど く
ま れ る。 す ち の ら み よ て あ ら め と お ど ら よ。
修理 大夫 物語 人 に。 く ふ で る 紙 ふ る ま ひ を
物 る ま く し 紙 人 修理 に。 く ふ で る 紙 ふ る ま ひ を
似氣

釈 内侍ハ年ごろ ひ て ま ど い ま ど 流
流め紙 あ ら ら ふ 弱 紙 人 あ る ど
ら あ ら ら の の ど ら い ら く
ら ら ど ら ら の を ら く ら ら れ ば
を ま ま ら 別 く ま ら く あ ま て る
中 ま も 源氏 ま を い ら ふ す る ふ ち
あ ら ん と ら び ま ふ ふ ら ひ く
中 ぬ を ま と あ ら ら と ら あ ら く
ハ ち ら あ 紙 る ら ち つ と 八 俗
ま ら ま や ら と ら あ ま ま。
新 巻 所 隣 句 ど も 皮 恵 ら を
年 年 ひ て も ら り ま ら び ま
く ま て い ら ん あ ら ま て い く ら る ら
ま で ま す ら ふ ま ら く も ま て ふ
あ ま く く で ぎ ま あ も 消 も 中
ね を ま ら と あ て ま ら ふ 近 で ま ま
じ ら ま る と く ま る を ら 詞 あ
後 の 格 ら ふ あ ま く 文 の ま う 紙
い せ 物 ら も ら ふ 紙 作 ハ ら ま
あ ら ま く 日本紀巻五十年 神 乃脱甲而逃之知不得免叩頭曰 我君 我君 ま ま 又号叩頭之處曰 我君
ら ま ま ま

やぶくさをかてあさうべて
ぎ[illegible]もみそうれと
うちとけく　湖　内侍のうちづ
くろひもあく折とけて乗る時ふ中
将ふねくされてそひまどひしきの
ゆきふねの中ゆきいらぎ[illegible]ろ
あるくもるくえつけるひく
釈　あゝぬさはふりてあてて
ろゝさをみるるゝに
ちはくはねるといふすを老く
見えるまく
あこゝ　細　中将の除さう
てあくとざとおぐ侍とそてて
てのくあるとんるふ
釈　中ねとんるあふいくをち
しくあるて太刀ぬきこる脇ど
らくくつこのへこゝ
祝ときのゝ　釈　あとんちゝ
まこるぶおをふるのくを色く
おりて吹切て笑ひすゝく
まゝとよはうゝゝるとよ
新　うゝゝは現心をゝゝ暮れ
らるてはかゝはちるゝ　あ侍ひふ
やゝいとんぐゝ

ゆゝぬるゝ。
ゆゝへゝゝゝ。際
ゆゝをゝ。トラへ
ゆゝをゝ。ゝゝけるゝすゝゝ。
うちゆゝめくゝゝゝゝゝゝゝ。
いゝをゝゝなるゝゝ。バカ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ドウゾ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。太刀
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。金持ち向
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。好
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。若
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

○卅一

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

なにきんとあらへむ。つとそへてさふ
直衣 著
ゆうづつのぶ。ハナレ 佩刀
中ねのゆびをひきさくぬぐせうへバ。ぬぐ
帯 解 脱 メグ
しとすまふ。そろくひっぱりアフ。
アラソフ
もろびハほろくとさそぬ。ゆね。
紐 キレ
つむめる名やもゆいでんふちかく
言 交 ウラミコイナキ
ろぶるかゆ中れ衣ようへよろきバしる
ろ。ぬとい。
かれるれ物とさるく衣きるとうす
シリナガラ 着来
きんとそんるといひちてうくやくれ
言 交 ウラミコイナキ
ちどけあすぐふひきれさまそ。ふいで
ラチモナイ イキ 源頭 出

なるべ〜 家 衣ハ著といひ
うけうる枕詞かして上うすれの原
あり時も今衣あるまバ
う〜や〜ゐれ 玉 あく人のう
へをとゝぶんすゆ人のまきれるす
もあり家と同きすをいふ同
らハあもへもこもふすぐこの
見ぐるれをいくり同のつぐき
ゆもんはべ〜あるあ見ふそれ
もりぐれきぬのやうふう〜や
ミあく見をう〜むぐうをも
おちこまれるはこ〜ぬきおび
同 おふ直衣ぶうを立てとこ
評 者ハ中ねのくしふけおびを
えぐ〜まゆ〜ぶくゆうのす
まぐんを夢されるまつさい
いとめぐ〜
う〜みてもう 新 う〜みハ浦
うれハ具くらをもも引もあぐう
もぬ波汐あぐのようせ同く
家 おのをさハ源氏をひ中ねと
立てきあうきすのひてそそ引つま
てくうのひ〜あぐういたあく
悔くても恨くても今ハうひ也 辻

○りみちの実

ぬぎすゆ。とそひふ〜ゆ。同待てあさま
サメウ 合 キヨウ
しくれぐ〜まバ。ぬちとそれるはさ〜ぬた
落 留 指 貫
おびるぐ。つとめて。
帯 朝ハヤク
うゆ〜みてもいあうひぐちたたを孫ひき
てかへわ〜波のなぐあ〜ぬ〜ふ。と
あ里。おもふれさはゆ。とんすもわくそれど。
アツカハヅラ イぐ
ちとわるとんすもさ。
ナサケナイ 手ぐ
いぐぶちぬふんハさちぐみどよせそん
いそ波いぐ〜うんぬ。のくんをそる。れ
帯
ひとゆ中ねれなゆとそわ。ゆぐはありよりハ
直衣

[illegible]

あやしの者どもや。おろそかにてみざるべく人ハ
うべをもとめ（ナルホド）（バカ）（シ）（ク）
けんをもえらん（治）ことをもとめざるつけさせ（綴）（先）
ておこせ（著）をいうでとりつゝんとやはし（シンダワイ十）
このおびをえざるまゝ（得）（ケチヲシカラウ）
いろふ（紙）ふたゝみく。
中きゝ（係）ばうごとやおのとあやまきり
きしのおびをとりくぶふんべくとそやり（遣）
（縹）
おのの者ちうへ（ヲリカヘリテ）
ありけり。

[illegible]

おびハ中れのあるうち　風 直衣のうへ人よりまる者く伊勢物語の指貫よりへくまるこ
ゑはあり　のきれを用のゆえの直衣ハ二藍（ふたあい）　宛 聽直衣人者ハ直衣のきれを用ふ用のゆえ　伊氏ハ宰相中将くもこ二あのゆえ
阪中れハ年ハきさりくれど官ひきくよりくくゝ紀二藍の直衣を是用まゝ　宏のゆえ紀ハ去城の
をもちゐ宏のひきくハゆえ紀ゆを用ゆるゆゑくひくゝ今阪中れハゆえ紀二藍ゆゑ
をふりといへるく　鬘 ゆえ紀ゆふ伊氏を此阪ゆて宰ゆ中れゆ
ちくゆ神もゆゆ　鬘 源平盛衰記廿三維盛ハ赤地の錦ハ直
人ハ神の指ふゆ長きゆ端神といへゆ　雜 ゆゆ
岳ゆ大頭（ゆ）端神ハ他地の指ゆ　　　

中さくらばこ〜

花 石川のこまうどふ地びをとられてかしきくいもるいうある芽ぞもあぐしおびの中ハさん
さる催馬楽呂石川今紫草をくふらーれさうハ石川の公任あり又あぐすぢのみちれたてあるひろち帯の
うぐとぐりもものでんとぞそあーとあるとバ帯ふかぐといはせあり〜〜 鬚帯のうこハ和名抄腰帯具ハ鈕
具 上音古巧反一音教鈕具也間云賀古今按唐令所謂玉鉤是也腰帯及鞍具以銅属革也とぞ〜賀古これ〜
こハ字音あるとど漢ふ分ものもよめり 鬚谷川士清云和名の鈕具ハ即帯鉤あるとバかざの多くなふひろち帯
のうぐてあぐとぐとぐ人てよめり 釈 ものの中さえぐ〜石川の分れ詞を借て既中ねと肉付とめ中〜えぐとく
二句ぐとふ帯のかことをとへ〜〜〜〜流泉めぐ〜〜まて中〜〜〜ぐ中ねのうぐ〜〜をあるとバ賀んっとあやあまれて
うの石川ぬ分にいんるやう〜ある漂のおびハうてぐふれぐ〜〜れとものさて実ハ二位あぐ〜ものとふぐと
うくさるハ仏ちうるうあるとバ石川の詞をかりていへるぶかり〜ちさ
あちうくさ〜 畑 あ中ハうあうさへ引ぬまて絶さてるとう 釈 肉付を帯ふよてくくよめう〜あうよめう引反
まてうる女ちるとバ世俗の中れ分れあるよ〜〜ある中とうひくれ者をうくち帰んとあり〜〜して絶まてうる
〜〜えめうハ石川の分れ未白中ハ〜えめるとい中を用めういたくく
えのうまさせ〜〜 釈 ぐうぐ〜〜をバえ通まうぐ〜〜いひとへうるうさるハ保氏のうにぐ〜やかりてあやふ
さふぐ〜のさまへるぐ分く
いとうぐうふ物をさまうて
釈 保氏ぐ人よびの鈕まれあぐ
ふふ物をとぐ保〜て居ものく
旧住保〜中ねとているハとひ
中ねのうハ次よいく〜
おうやけ中ねやく〜〜
花 既中ねぬ貴者うふふおく
宣下のうぐ〜もうひまるをいく
湖 師 貴そ〜〜ハ義人既後上人
のめ〜ら〜いふ〜

既中ねぬ
ぬ
てきうあるあ中とうう〜ん〜えのうまさせ遁ハ
じとあ中ぷ〜ひ〜みておめ〜〜各々反上たうあり
ぬへう。いとまぐ〜にあのぐ〜ぷ〜ぐ〜係
おとすふ〜ふ彩の天もいとをう〜〜ふぐ〜ちかやけ笑公

いとうぐうすくふうあるを
釈 ふるうくいきとうさる仲す
くあるうあるハ和らぬ仲く
うくふかをまう 釈 保も既
もよくのうれそひ出れてく
くまたさ〜ようて 釈 人の尺
ぬ間ふ既中ねぬ保氏ぬのをとさ
ようてうう
ぬうくハうるひぬくう
湖 ぬうよ〜ん中ぐ〜ハ〜うあ中
やというくんとぬひて〜伊めやあと
あひとうあ尾く 釈 ねさげかるまう
月〜のうもうさとかくいうさ
さ保〜てものれとぬふ尾ぬをせ
んとうあふさまく
うう〜〜〜うう〜ん〜〜て
湖 既中ねの関係ぬうう〜ん〜とひ
く来つ〜んふ立ぬうう〜かへ〜れ
しいい〜〜〜〜
うしやを中 餘 業ふ六帳立ぬ田
人ぬハあまのうるもふ立けとも
ぬとまう〜ぐ〜や立中ぬ分て
いて〜下にとくのあるとあれバ
人ぬのをうさをとひていへるあ

○めみちの笑

ぐとおわく〜〜奏してぐ〜下ぬ見ふくぷ〜ぬ〜〜〜キット
しくまて〜〜〜〜

うしみてる成。（原）
中ねたいもうとの君のもゆえいでぬ。
さるべきをわれおぼ（嘱）くきふきんとぞおもひ
そえ。◎やんぬ（葉月記）とれきはちぐれはふるもち（腹々）
ぶふうへのはてのことるはふるづる（カクベツナ）（ムツカ）
ちぐわてぬとてふさわゆのまへるとこの（デモ）（源ハ）帝
中ねそぱ（こガリ）（別）（避）
あきまふはけてもどひいぐみゆるふ。◎（更）（消）（マイ）（ツチヨイト）（挑）
この君ひとわぐひあ君のはもうつはら（腹）
なわそるはは門の内ふといぐるりふこそあれ。（葵上）
（源心）（イたた）
掃をぱなるぐ（源心）おぐぐとゆあまでぬはぐ（イたた）ゑ

○あみだちの矢

ことふるぐみこぐらてぬまるふくか（皇女）（腹）
ぱるまてるはぱるりおるべれきは。（ドしホド）（労）（分限）
とわぐちはなるべ。人ぐもある（ジンビン）
屋さかぐわとのひく。ぱぐもあ（アリタ）ま
ぱるうるひてぐあ。ぱひそる。◎この（足）
ぱ中ぐもれいぐみこてぐあ。ゆ（挑）（奇妙）
しの。さ弘ぐどうれきくくなん。（書止名）

細兵ごうるさくてもんとのよ
まぐそるの地く 釈 これより八坂中
初の阿氏君をいぐ。の。ふ中氏
ようをいひとくくやんとあ阿氏
孩くの阿ふるちと八年紀后義
ぶれは孩ふはをまるへる親王
るちとのあさく
うへのはあてあ。のこ
釈 阿氏忘六帝の阿一孩和氏格
別ぶるあよ自然とむつ。あて
行るもあつるさけつ。あ。ひ
掃。ぶ。ハ。ぶのあねよとく
この中ねいさ。ふ初。ぶ。れはと
細 後もく阿よハ所をぶるへ氏
中ねいさもるれ。 釈 れ。ぶれ
ゆ。ぶ。とハ行るをも光映ぶく
つふされぶ。ぶのあく

殘 葵上と一腹阿中初ぶ阿門のはるハ姪くみるれ阿姉のもぶあ
湖 阿氏ハ市中ぶのあうこと。ぶ中の父も大臣の中ぶてかおぐ。ぶるふ
ぶ。ぶ。ぶのぶふてあ。ぶれてぶぐちまへバ阿もまのぶ。ぶ。ぶ。

七月まで藤ツボ為置ぬるのふぎりし源氏の君宰
相なれば出門下居のさせ給ひぬるのちの
ぬるつゆ近ひちらすりてこの若宮のみやを
ぬるの東宮若宮のみやを見給ひ
たるに母方の人おそせぬ侍ちうるみか
みこ皇子ちふく源氏公おはやけ事ちう
ぬるぞ藤ツボ動ぬるをぶにう

評上文やんごとなき人は抜く

源氏君と弘中れとの中はいとこまやかなるはいかもさるべきにぞおはし
かりしうとみをとるふかくこの源氏の君をひめきさてゐるあるへしまれとうるさくてあんとハ物いとなメ
のといかりうとしひてて抜しかひくるとのまでハ弘中れの源氏君ハ所を抜ハいとこのよのおよしを
らぬさてこふいとうく事ハ内侍の事を絶くちとぬるれう事ハまいの法あるくいとくめでし
七月まで左のおのおのしつられるハ抜きるの人の後ようそひいでるあるくやふりさるぬふまるあるくるふて抜此例いとあり

源氏の君宰相ハ参議ハ任じ給ふ

源氏の君宰相ハ風桐壺
帝門なるまもうんの
事ハ下位ハ紀ハ下ハ
ちうふそとハ近きまとハ
めしなれしく
ハ若宮の方を抜ハ
後の若宮冷泉院
朝師ハ宇文方
ハ抜ハ
ハうしうしうるのハ
河とうる文殿院の序外舅ハ抜
なるて人ハ抜ハ
人ハ源氏朝柄右大臣
能有例抜
源氏のおやけのまうるのすち
ハ抜ハ 新若宮ハ文ふうち

ゐんにて東宮ハ位ハ下ハ宮ハ
とハ物ハ抜ハ
ハ弘徽殿ハ
ハ源氏ハ
ハ源氏ハ
ハ弘中ハ
ハ抜ハ
ハ抜ハ
ハ抜

釈 [illegible]

[illegible]

釈 [illegible]

[illegible]

釈 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

いと見まうこそげるを云く　玉補　いとハいとゞあるべし　※若紫の源氏君と見まうこそげるを云く
で似ぬくるを若紫ハいとくるしとおぼせど人ハさるとハそひよりぬあるべし何も評判をせぬとし評おをぬ
といふ源ハあるをもでめり已といふ辞まそおのづからもちゆあるし
ゞふいるを自ふつゝり久て六ろく　※こゝの君ハ源氏君の所ゝもハかぎりも和くあでこれバ詠くを
いやうるゝるくもふ俗り久こゝもも源氏君ハ劣らぬくもちえこの人ハせよ出ふまゞ物るを若紫の
侍ゆゝ俗して源氏君と同ゞさ侍ふ見ゝ和ふハ見と自ゝの光の大君ゝ似ゝるひゝるやうるものと
せ上の人もゝくるといくきゝ々ふといくるハ見まうゝ見ゝげるとあるゝ俗うけゝ々ふとゝくゝ見ゝの光
のゝ〳〵せの人もゝくるといくるゝゝゝひよるゝ人ゝ見なあり已といくるゝを云くゝとゝひて俗ひめあるゝとこと
こまゝるゝあり俗せよ出ふのゝ〳〵ふまゝゝといふ下ゝ俗るふ若紫のゝ見ゝ俗ゝゝ見ゝすでふおひ出ふくるゝ山ゞのゝるを
含めてゝくゝ侍ゝゝべし

評　※若紫ハ大りゝ若紫ゝのゝを主ゝして且若紫ゝの地ひ出ふくゝ手ゝといふ寒ゝあるゝふ此くゝをゝてゝちあ
らまゝくゝり七月ゝ若紫ゝ所ゝふゝめ已といくるゝゝ下後のゝゝくゝ先源氏君ゝ手ゝあゝゝゝう
ゝひぬゝといひゝて次ゝ手ゝの行ゝふゝせゝゝん侍ゝ下ゝを若紫ゝを東ゝゝゝとゝあゝじめれ
ゝゝう侍ゝ侍ゝんのゝゝ手ゝをいひくゝ若紫の立后もゝれゝのゝあゝるゝゝを説きゝ手ゝ江徽殿の所ゝを
評ゝてゝやゝゝく侍ゝ手うゝくゝゝり申ゝべゝき侍ゝを侍ゝふゝゝゝ次ゝ若紫の系図ゝ源氏君ゝも侍ゝ徳ゝゝゝふ
ゝゝ侍ゝいひてゝの侍ゝ落ゝんゝゝるゝべゝたゝゝゝをゝゝゝゝを侍ゝゝゝ知て業平親王の古手ふゝひゝゝて意のゝゝに
ゝまゝゝゝゝゝゝて若紫のゝおゝずけゝふゝゝゝをいひくゝゝ人の源氏ゝ似ゝゝゝと類ひゝゝゝめゝゝをゝとゝ
ゝらまゝくゝゝる侍ゝゝ申ゝゝまゝゝた出ゝゝゝくゝゝ手ゝゝゝのゝれ三三句ハ侍ふいみゝゝくゝゝめゝれゝゝ
手ゝつゝたゝゝてゝかゝゝゝでの文ゝたのゝけゝても及ゝゝ次ゝ若紫といべゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝけゝでゝゝゝゝゝを若紫といべゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ